教学マネジメントの確立に資する事例の把握等に関する調査研究

調査目的

「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」での提言を踏まえ、中央教育審議会大学分科会では、令和２年１月に「教学マネジメント指針」を策定した。教学マネジメントの確立に当たっては、学修者本位の教育への転換という目標に向け、様々な教育改善の取組を有機的に組み合わせて実現する必要があることから、従前のいわゆる「供給者目線」で教育を提供してきた大学がゼロベースで教学マネジメントの確立に向けた取組を進めるには多大な困難が伴うことが予想される。
そのため、文部科学省としては、教学マネジメントの確立の観点から全国の大学にとって参考となる先進的な取組事例を収集し、その普及を図ることを目的に、好事例集として取りまとめる。

調査方法

教学マネジメントの確立の観点から特徴的な取組を行っている大学を選出し、当該取組と教学マネジメント指針における各プロセスとの対応関係を明らかにしながら、当該取組の具体的な内容を好事例として収集した。

このうち、特徴的な事例を選定し、教学マネジメント指針に関するＰＲ映像の制作を行った。

【PR映像あり】
- 立命館大学
- 桜美林大学
- 国際基督教大学
- 山形大学
- 金沢工業大学

【事例集のみ紹介】
- 筑波大学
- 横浜国立大学
- 愛媛大学
- 山梨県立大学
- 共愛学園前橋国際大学
- 東京都市大学
- 北陸大学
- 関西大学
- 独立行政法人国立高等専門学校機構

■検討委員名簿■

大森　昭生	共愛学園前橋国際大学　学長
沖　裕貴	立命館大学教育開発推進機構 教授
小林　浩	リクルート進学総研　所長
	リクルート「カレッジマネジメント」編集長
小林　雅之	桜美林大学総合研究機構　教授
◎日比谷　潤子	学校法人聖心女子学院　常務理事

※五十音順、敬称略。◎は座長

■好事例と教学マネジメント指針との関係整理

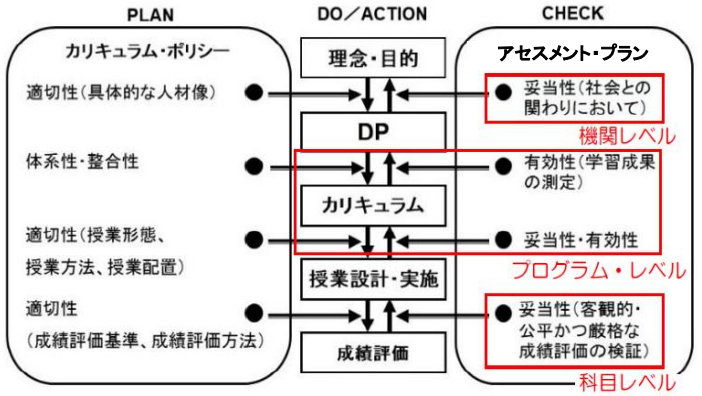
好事例として収集した各大学の取組について、教学マネジメント指針におけるⅠ～Ⅴのプロセス及びそこで述べられている取組等との対応関係をマッピングした。

	Ⅰ		Ⅱ						Ⅲ							Ⅳ					Ⅴ		
大学全体	○	○	○			○		○		○	○		○			○	○	○	○		○	○	○
学位プログラム	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○			○	○	○			
授業	○								○			○			○			○					
取組	アセスメントプランの作成	学修目標の明確化	教育点検評価（モニタリング）の実施	カリキュラムマップ・カリキュラムツリーの策定	アドバイザー制度	建学の理念やDPに則した教育課程の編成	授業科目の精選・統合	学期制の見直し	成績評価基準の明確化	GPA制度	学生アンケートの実施	授業評価アンケートの実施	アセスメントテストの実施	ポートフォリオの活用	ルーブリックの作成	ＦＤ・SDプログラム	マネジメント層へのFD・SD	教育支援センター・学修支援センターの設置	教学IR部門、教学マネジメント部門の設置	学生情報の共有化	組織対組織の情報交換	インターネット上での学生の情報発信	情報公表におけるデータ活用
立命館大学	○								○		○					○							
桜美林大学				○	○					○										○			
国際基督教大学											○	○						○					
山形大学				○									○						○				
金沢工業大学			○			○															○		
筑波大学			○					○											○				
横浜国立大学									○						○								
愛媛大学		○									○					○	○	○					
山梨県立大学		○		○								○											
共愛学園前橋国際大学		○												○	○							○	
東京都市大学							○	○						○	○				○				
北陸大学		○		○		○	○				○				○					○			○
関西大学		○									○			○					○				
国立高等専門学校機構				○		○							○				○						

■事例の紹介例①

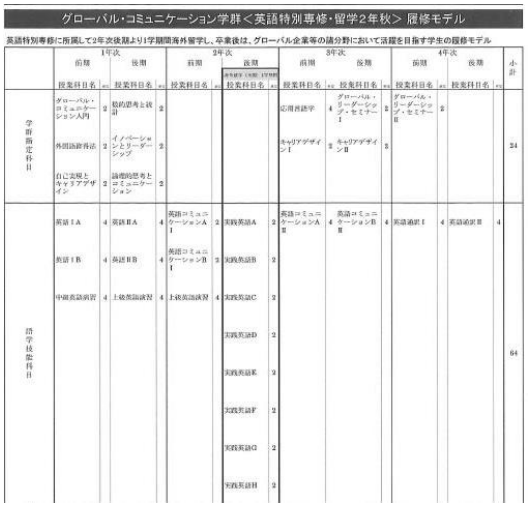
立命館大学：プログラム・レベルでのアセスメント・プランの作成（Ⅰ「三つの方針」を通じた学修目標の具体化）

- 立命館大学では、機関レベル、プログラム・レベル、科目レベルでアセスメント・プランを策定し、検証を行うことを求めている。
- プログラム・レベルでは、策定したアセスメント・プランに則って、大学教育の成果を点検・評価する。各学部・学科は、まず１年間の計画を立て、その中でアセスメント・プランに則り、できるだけ数値化できる目標設定を行う。
- この目標は、目標達成を測る評価指標・評価基準を備え、それに基づき達成度を把握するように設定される。当大学では、このような明確な指標・基準に基づいて目標設定や評価を行う、言わば「評価文化」が根付きつつある。



桜美林大学：カリキュラムマップの策定、履修モデル・アドバイザー指導（Ⅱ授業科目・教育課程の編成・実施）

- 桜美林大学では、大学全体のDPを策定、これに基づいて各学群（学部相当）・専攻プログラム等（学科相当）においてもDPを策定している。これらのDPに則った形で各学群・専攻プログラム等のカリキュラムマップを策定している。
- 上述のようなカリキュラムマップは、学生の履修の目安とはなるが、具体的にどのような科目を履修していった方が良いかなど具体的な資料にはなりにくい。そこで、当大学では、DP及びカリキュラムマップに則った形で、各学群・専攻プログラム等の履修モデルを作成。
- 履修モデルは、学生個々人の志向によっては調整が必要になる。そこで、学生がスムースに調整が行えるように、アドバイザー制度を活用している。

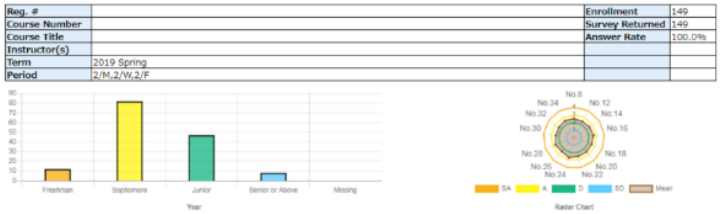

グローバル・コミュニケーション学群＜英語特別専修・留学2年秋＞ 履修モデル

英語特別専修に所属して2年次後期より1学期間海外留学し、卒業後は、グローバル企業等の諸分野において活躍を目指す学生の履修モデル

■事例の紹介例②

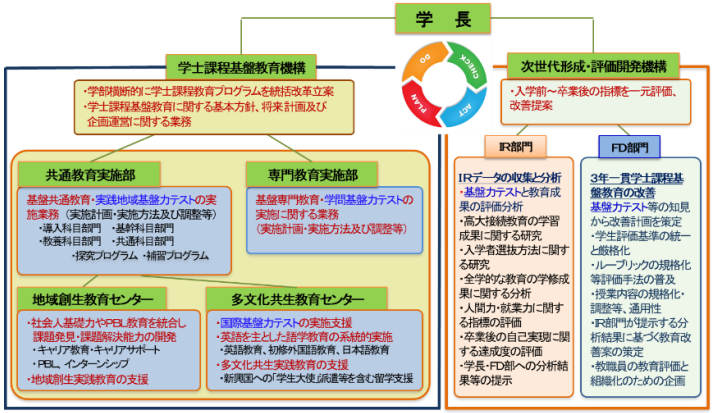
国際基督教大学：授業効果調査（Ⅲ学修成果・教育成果の把握・可視化）

- 授業効果調査は毎学期の最終回に実施する。本アンケート調査では、自分がどのようにこの授業に取り組んだか（この授業のためにどの程度の勉強をしたか、どのような能力を身につけられたか など）、また授業そのものに対する評価（この授業に触発されたか、教員の課題に対するフィードバックは適切だったか など）の設問を設けている。



山形大学：次世代形成・評価開発機構IR部門（Ⅳ教学マネジメントを支える基盤）

- 山形大学の次世代形成・評価開発機構は平成２８年に設置された学長直下の組織である。これと対になる組織として学士課程基盤教育機構がある。この両組織で大学の教育に係るPDCAサイクルをまわしている。
- 山形大学次世代形成・評価開発機構IR部門には２つのミッションがある。ひとつは、IR（Institutional Reserch）であり、もうひとつはIE（Institutional Effectiveness）である。IEとは、IR機能を活用して効果検証を行い、大学コミュニティとして継続的改善の循環プロセスを実行することであり、PDCAサイクルをまわすことがミッションである。IRだけを行っていてもその結果が活かせなければ意味がないので、IEを意識した活動を大学全体で推進している。



金沢工業大学：ステークホルダー交流会（ステークホルダーウィーク）の実施（Ｖ情報公表）

- プロジェクトデザイン教育等では、関係者や資金提供者に対して活動報告を行っていたが、同時に学生の出身高校や保護者などに報告範囲を広めていき、現在のステークホルダー交流会に発展。
- 各PJの報告会を実施時期を集約して多くのステークホルダーに多くの学生の発表を見ていただく「ステークホルダーウィーク」として開催。